

99. 12
霊性センターニュース
139号



説教『会員の使命』
霊性センターカルメル
詩

断想（143）

ヘンリ・ナーウェンの『旅路の糧』（17）

みことばのひびき

キリスト教霊性史の中における聖人たち（7）

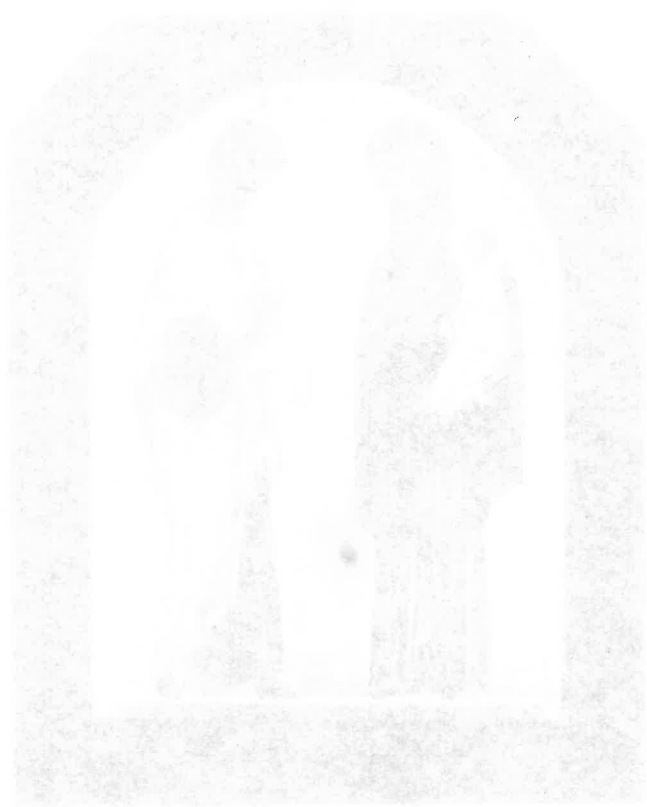
エクソシズム（1）

フォコラーレニュースより

諸所の企画についてのご紹介

お願い

1981
 東京エニクス社刊
 1981



【本報記者会】

（以下は極く薄い文字で印刷された、ほぼ不可読な縦書きの文字列）

『 会 員 の 使 命 』

福 田 正 範

イエズス様の神秘は、神であるにもかかわらず、私達人間の一人となって私達の労苦を背負われたというところにあると思います。神が人々と出会うために人間とられたのです。私たち一人一人と本当の意味で出会うためにしもべの姿をとって、私たちに従う者となられた主の生き方を、私たちは深く黙想し、それを生きる者とならなければなりません。私たちは、自分の権利が無視されたり、名誉が踏みにじられたりあるいは、気にさわるようなことをされたらどういう反応を示すでしょうか。心をかたくなに閉ざしたり、あるいは、一生恨みに思うことさえあるかもしれません。

イエズスは、このような私たちに何を伝えようとしてこの世に来られたのでしょうか。私たちはこのイエズスから何を学びとって生きるべきなのでしょう。キリスト教は愛の宗教であると言われます。現実の私たちにとって、この愛を生きるということは、心の血を流さずにはあり得ないことです。主は、「七の七十倍までもゆるしなさい」とおっしゃいました。つつみ得ないものをつつみ、自分の感情ではゆるし得ないものをゆるしていく生き方は、自分が傷つくことをおそれていてはできないことです。「御父があわれみ深いように、あなた方もあわれみ深い者となりなさい」という主のことばを思う時、自分の無力さをなげきながらも私たちに仕えるために奴隷の姿をとって来られた主イエズスの愛に出会って、その力によってまわりの人々をも受け入れていく恵みを願いたいと思います。皆さんが在俗者会員になったのは、このイエズスの姿をみて、それにならう者となるためなのですから、他の人以上に主の謙遜と愛を生きる使命があると思います。

そのことを忘れてしまったら、気心が知れた内輪だけの集りの中で、互いが自己中心的な自分の思いを実現させる場になってしまう危険さもあると思います。

愛とゆるしの心をもって各自が頂いている賜物を互いに生かしあう訓練をする場、また、互いに仕えることによってイエズス様の心を生きる場として在俗者会があるのであり、そのような場に自分が招かれているということを忘れずに、イエズス様への奉仕、教会への奉仕を生きる者になりたいと思います。

まず、神と隣人にゆるして頂いていることに気づき、感謝するところから私たちの歩みが始まりますように……。

1999. 10. 17

(在俗者集会講話)

霊性センターカルメル

1. 聖書深読黙想会

- (1)上野毛聖テレジア修道院（黙想）(1999年黙想会年間スケジュールのページを
ごらんください)。
- (2)宇治聖テレジア修道院（黙想）（1999年黙想会年間スケジュールのページを
ごらんください)。
- (3)名古屋教区聖書深読会

1. 日本カトリック研究センター

〒466-0834 名古屋市昭和区広路町隼人30 TEL. 052-831-5037

FAX. 052-831-5317

2. 宇治カルメル会 聖テレジア修道院（黙想）

〒611-0002 宇治市木幡御蔵山39-12

指導：奥村一郎師（カルメル会士）

連絡：小林 厚 〒465-0058名古屋市名東区貴船3-2115

* 申込・締切り 実施日2週間前 * TEL. 052-701-3685

(4)大分聖テレジア修道院（黙想）

指導：奥村一郎師

連絡：富田恵子 〒870-1125 大分市上宗方1803-3 TEL. 0975-41-4012

(5)聖書深読箇所（通信）原則として月の第2日曜日

(6)通信聖書深読

朝日カルチャーセンター（東京新宿）が通信講座のなかに『聖書深読』を
組み入れてくださることになりました。ご希望の方は下記にご連絡ください。

連絡：戸張由美子 〒163-0201東京都新宿区住友ビル 私書箱22

[註] 「聖書深読法の生いたち」（奥村一郎）。オリエンス宗教研究所出版。

参加者は持参下さい。定価 1000円。下記に直接ご注文下さい。尚、3冊以上
注文されれば、20%引きになります。

オリエンス宗教研究所

〒156-0043 東京都世田谷区松原2-28-5 TEJ. 03-3322-7601

FAX. 03-3325-5322

2. 聖書と念祷の集い No.8

星野正道神父 (毎月1回)

- 日 時：12月25日(土) 3:30～
 - 場 所：上野毛教会・信徒会館 26号室
 - テキスト：神との親しさ(2)『祈りと対神徳』伊達カルメル会訳、聖母文庫 500円。上野毛教会売店にあります。
 - 急に変更になることもありますので数回ご出席になってみてその後、継続しようと思いいなる方は連絡網に入っただければと思います。連絡網に入っていない方は、土曜日の午前9時30分から11時30分の間に修道院の受付に 電話 をして変更がないのをたしかめてからお出かけください。 TEL. 03-3704-2171 カルメル会修道院受付 久岡
 - その他、夏休み、冬休み、春休み などのお知らせはこの霊性センターニュースに掲載いたします。
 - なお、この集いは前半約40分の講話と後半約45分の沈黙の祈りで構成されています。
 - また、この集い終了後、5時30分から6時まで、全世界の人々の為に祈る神の民の祈り「教会の祈り」、
 - 私たち一人一人を母の愛をもって見守る聖母マリアへの祈り、「サルヴェレジーナ」
 - 主の受肉と十字架を通しての復活を賛える「お告げの祈り」、そして
 - 希望者には主御自身の御体をいただく聖体拝領が続きます。これらにもご自由にご参加ください。
- そして大都会の中のオアシスをこの修道院で探り当てましょう。

2000年 カルメル修道会東京・上野毛聖テレジア修道院（黙想）

黙想会年間スケジュール

1. 信徒と奉獻生活者のための個人指導黙想会

スタッフ 星野正道師、福田正範師（以上カルメル会）

Sr. 中川享子（ケベックカリタス会）、他

(1) 6月 1日（木）4時から10日（土）朝食

(2) 10月20日（金）4時から29日（日）朝食

全期間参加の方優先ですが二泊からの部分参加も可能。

詳しくは申込用紙を御請求ください。

2. 奉獻生活者のための黙想会

(1) 7月24日（月）4時から8月2日（水）朝食 福田正範師

(2) 8月11日（金）4時から20日（日）朝食 山田裕於師

(3) 12月26日（火）4時から翌年1月4日（木）朝食 福田正範師

3. 聖書深読黙想会：次の各土曜の夕食から日曜の16時30分まで

(1) 4月15日から16日 奥村一郎師

(2) 7月 1日から 2日 //

(3) 9月30日から10月1日 //

(4) 11月25日から26日 //

(5) 12月16日から17日 星野正道師

2001年

(6) 1月27日から28日 奥村一郎師

(7) 3月31日から 4月1日 星野正道師

4. ウェンズデイ・リトリート スタッフ：星野正道師

「キリスト教再確認」（音楽瞑想、講話、分かち合い、ミサ、etc.）

(1) 5月17日（水）10時から16時

(2) 6月14日（水） //

(3) 7月 5日（水） //

(4) 10月11日（水） //

(5) 11月 1日（水） //

5. ウィークエンド・リトリート 新井延和師 (カルメル会)

(最初の日の夕食をすませてから集合。どなたでも参加できます。)

- (1) 4月28日(金) 20時から30日(日) 15時 「復活」
- (2) 10月13日(金) " 15日(日) " 「アビラの聖テレジア」

6. 特別企画黙想会：いずれも通い可

- (1) 5月 9日(火) 夕食から11日(木) 昼食 アロイジオ師
- (2) 12月1日(金) 夕食から 3日(日) 昼食 チプリアノ師
- (3) 2001年1月16日(火) 夕食から18日(木) 昼食 奥村一郎師

7. 大祭日のミサにあずかるために：チェックイン 午後3時から

(講話なし) チェックアウト午前10時まで

- (1) 復活祭 4月22日(土) 夕食なし～23日(日) 朝食
- (2) クリスマス 12月24日(日) 夕食なし～25日(月) 朝食

以上、1.から7.までの申込はカルメル会上野毛聖テレジア修道院へ。

皆さんが企画なさったグループ黙想会、個人黙想も歓迎いたします。

カルメル会上野毛聖テレジア修道院 (黙想)

〒158-0093 世田谷区上野毛2-14-25

TEL. 03-5706-7355 お急ぎの場合 03-3704-2171

FAX. 03-3704-1764

8. 青年黙想会 (35歳までの男女)

スタッフ：カルメル会士

- (1) 5月13日(土) 16時から14日(日) 16時

希望者には5月12日(金) 20時から始まるプログラムもあります。

その場合は最初の日の夕食をすませてから集合してください。

- (2) 11月 3日(祭・金) 12時、昼食から 5日(日) 16時

青年黙想会のお問い合わせ、申込はハガキかFAXで下記まで。

〒158-0093 世田谷区上野毛2-14-25カルメル会

青年黙想会担当神学生 FAX. 03-3704-1764

修道生活、司祭生活を考える若者の集い

NO. 11

この修道生活、司祭生活を考える若者の集いも皆さんのご協力で小さなあゆみをつづけております。この集いは特定の修道会へのおさそいの集まりではありません。教会生活を送って行く中で今までとはちがう生き方もあるのではないかと、思っている若者がひとりぼっちでひざをかかえているのはよくない、同じように感じている仲間と出会い、ともに祈りながらあゆんで行けたら何かが見えてくるのではないかと、ということで始まりました。もし君がそんなひとりだったらぜひ来て見ませんか。

*日時 12月12日(日) 10時から16時まで、昼食は各自お持ちください。

*対象 30才くらいまでの独身男女青年

*スタッフ カルメル会司祭 星野正道

*費用 1000円

*内容 主日ミサ、講話、質問コーナー、個人面談等

*持って来るもの 聖書、ロザリオ、筆記用具、昼食等

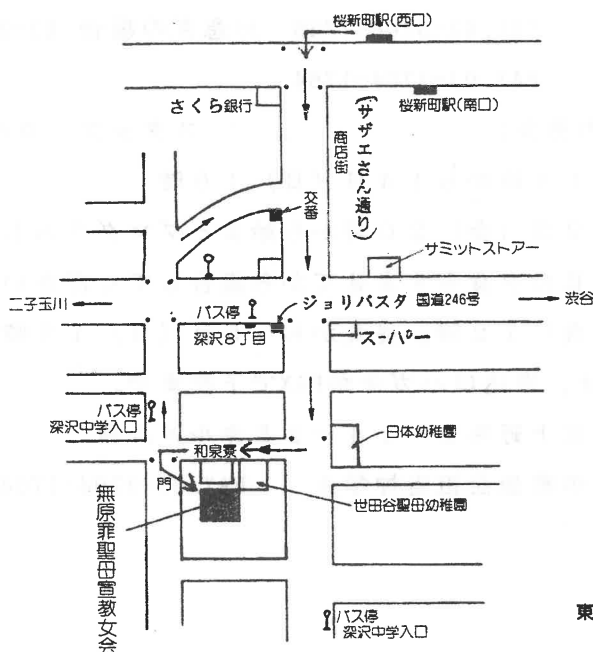
*連絡先 158 世田谷区上野毛2の14の25 男子カルメル修道会

星野正道神父 TEL03-3704-2171 申し込みの必要はありません。

*会場 無原罪聖母宣教女会修道院 158 世田谷区深沢8の13の16

東急新玉川線桜新町下車

TEL03-3701-3295



(地下鉄) 桜新町下車
徒歩12分
渋谷より新玉川線
二子玉川方面

(バス) 深沢8丁目下車
徒歩2分
渋谷駅南口
35番のりば
(新道経由) 二子玉川園行
高津営業所行
砧本村行

(バス) 深沢中学入口下車
徒歩1分
目黒駅より成城学園駅行
又は弦巻営業所行

無原罪聖母宣教女会

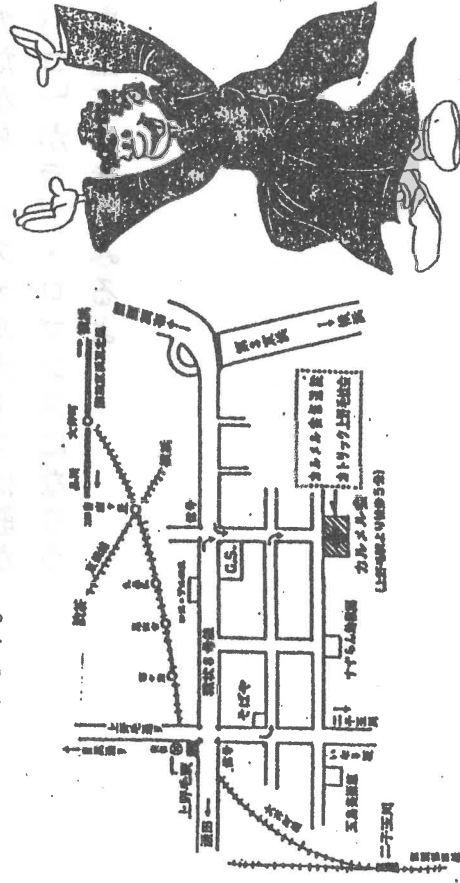
東京都世田谷区深沢8-13-16
☎3701-3295

T. T. クラブ

～10代・20代の 青年たちの集い～

カルメル会で10代・20代の青年たちの集い『T. T. クラブ』を行っています。このクラブの特徴は、現代の話題を使って、お互いの話を聞く、自分の意見を話す、また伝わってくるものを感じ取る、自分の感性を表現するということを中心に行きます。その中で、お互いの神様から頂いた“宝”を発見し、よりよき人と共に生きていく可能性をさがしていただければと願っております。

ぜひ、参加してみてください。わたしどもスタッフは心からお待ちしております。



- 第25回 7月10日(土) 「教会仲間」
- 第26回 10月9日(土) 「みんなで遊ぼう! (2)」
- 第27回 10月23日(土) 「私たちの居場所」
- 第28回 11月13日(土) 「未来への希望を抱いて」
- 第29回 11月27日(土) 「恵みと成長」
- 第30回 12月11日(土) 「神様のもとへ帰ろう!」
- 第31回 12月18日(土) 「姉さイエスを連れて、パンクエット」

- *時間 いずれもP.M.7:00からP.M.9:00まで
- *対象 10代・20代の青年たち
- *スタッフ カルメル会士
- *場所 カトリック上野毛教会 信徒会館 1F
- *プログラム

- 7:00-7:20 はじめの集い
- 7:20-8:20 みんなで讃美歌を歌う etc.
- 分ち合いの時間
- 分ち合いによりお互いの宝を発見する時間

- 8:30-8:50 祈りの時間
- 9:00 賛美の祈り・沈黙の祈り・祝福
解散

カルメル修道会

T. T. クラブ 係

〒158-0093 世田谷区上野毛2-14-25
TEL 03(3704)2171

VII

一九九七年十月二十八日

蛭田 幼一

——（自然人としての）我々は「愛することなんかできないな」。その通り。では金輪際できないか、というと、否。ただ^{おれ}恤みによって、奇蹟的に。「いつも風はあまく／道はしずか」（圏点、諸星）だからな。—— こういう返事がきた。僕は感動した。ここまで共鳴できるのだから。パステルナークは筋がよい、ときみは言うが。「ジバゴ」がラブ・ロマンスになりうること自体が奇跡だよ。僕は自由に生きてみるよ。

宇宙の子守歌 (2)

チビッコ広場

奥村 一郎

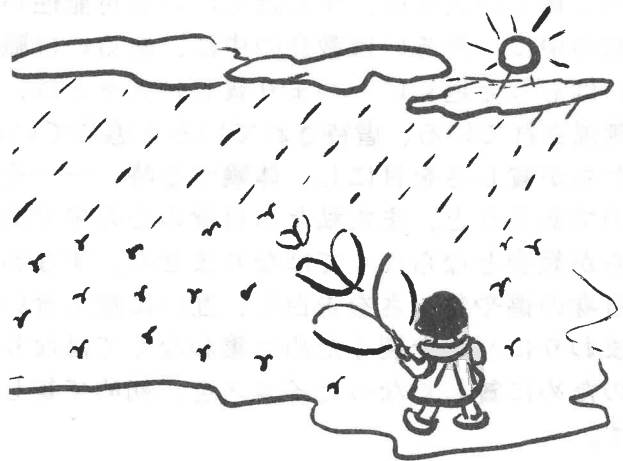
梅雨時のお洗濯 : 母と娘

すこしばかりの晴れ間を見て、急いで洗濯物を干しに出た。三歳の娘もあとからついてきた。“マリちゃん、お洗濯物が乾くまで雨が降りませんように、いっしょにマリアさまにお祈りしましょうネ。きっと、聞きいれてくださるわ”と、二人で手を合わせ「めでたし、せいちょう みちみてるマリア……」と一生懸命祈り始めた。すると、途端にポツリポツリと雨つゆが落ちて来た。一瞬、「ああ、どうしよう?!……小さい娘に嘘をついてしまって!？」と、マリちゃんの方を見ると、「アッ!お百姓が先に雨をおねがいしちゃったのネ」と、嬉しそうにいう。思わぬ答えにホッとして胸をなでおろした。いつかのカトリック新聞にでていた小話。

見事なチビッコ神学者。動脈硬化になり易い大人の頭に対し、柔軟な幼児思考の巧みな宙返りで自他共に救われる見事さ。難しい大人の言葉でいうと、前者は実態神学、後者は関係神学。まさに、三歳のマリちゃんは、柔軟な「係神神学」を地でいった。ママさんは、自分の事だけしか考えない。マリちゃんの開いた心と頭は隣人を容れる広さがある。野球でいえば、ママはバットだけ握りしめて哀れな空振り。マリちゃんはタイムリーヒット。

まだ会ったこともないマリちゃんだが、今でも見知らぬ私の道を照らしてくれる。

今、広がっている「親を育てる子供」という面白い題の本のなかにも、こんな話がいくつもあるかもしれない。



ヘンリ・ナーウエンの『旅路の糧』17

貧しい人々に目を向けること

人間のすべての組織と同様に、教会も絶えず墮落の危険にさらされています。権力や富が教会に入ってくるやいなや、ごまかし、搾取、権限の乱用、まぎれもない贈収賄等が、間近に迫っています。

どのようにしたら教会の墮落を防ぐことができるのでしょうか。答えは明らかです。それは、貧しい人々に目を向けることによってです。貧しい人々が、教会をその召命に忠実なものとしてくれるのです。教会がもはや貧しい人々のための教会でなくなったならば、その靈的アイデンティティを失うことでしょう。教会は、分裂、嫉妬、力による駆け引きの中に巻き込まれます。

パウロは言っています。「神は、見劣りのする部分がいつそう見栄えのよいものとなるよう、体を組み立てられました。そのため、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮しあっているのです」(1コリ12:24-25)。

これが真実のまなざしです。貧しい人々は、キリストの体としての教会が、お互いの思いやりや愛や平和の交換の場であるために、またそうあり続けるために、教会に与えられているのです。(1031)

貧しい人々とは誰か

貧しい人々は、教会の中心にいます。けれども貧しい人々とは、誰のことなのでしょう。まず私たちが思い浮かべるのは、私たちのようではない人々です。たとえば、スラムに住む人々とか炊き出しに来る人々、道端に寝ている人々とか刑務所や精神病院や養護施設にいる人々のことです。

しかし貧しい人々は、すぐ近くにいる可能性があります。彼らは、私たち自身の家庭の中に、あるいは教会の中に、あるいは職場の中にいるかもしれません。あるいはもっと近くに…つまり貧しい人々とは、愛されていない、拒否されている、無視されている、虐待されていると感じている私たち自身でありうるのです。

私たちが貧しさを目にし、体験する時、——それが縁遠いものであろうと身近のものであろうと、また私たち自身の心の中であらうと——まさにその時こそ、私たちが教会とならなくてはなりません。すなわち、兄弟姉妹として手を握り、自分自身の傷や貧しさを告白し、互いに赦し合い、互いの傷を癒し、イエスの食卓のまわりにパンを裂くために集わなくてはなりません。こうして私たちは、私たちのために貧しくなったイエスを、初めて貧しい者として認めることができるのです。(1102)

主の降誕

「羊飼いたちは神をあがめ、讚美しながら帰って行った」 (ルカ2:20)

当時の羊飼いたちは羊の所有者でなく、貧しい雇用者に過ぎませんでした。彼らは一晩中羊の晩をしなければなりません。神は彼らを特別に選んで、天使の大軍を見せ、誕生したばかりのイエス様に導くというお恵みをお与えになりました。彼らは天使の言ったことを信じて、「ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか。」と言って、急いで行って、飼い葉桶に寝ている乳飲み子を探し当てました。

ところで羊飼いたちは手ぶらで行ったのでしょうか。羊飼いは何かを持って行ったはず。「救い主」に会いに行くのですから、乳、毛皮など彼らのできる最大限の贈り物を持っていったことでしょう。そしてそれらは聖家族の必要をまかなったはず。

彼らは神をあがめ、讚美しながら帰った行きましたが、これで彼らの信仰が終わったのではないと思います。この後まもなく、ヘロデによる幼児虐殺があり、羊飼いたちはイエスも殺されてしまったのではないかと恐れたことでしょう。しかし一方で天使が指し示すほどの人がむざむざ殺されるはずがないと考え、救い主が活動を始めるのをじっと待っていたことでしょう。

洗礼者ヨハネが現れたときはイエスではないかと見に行ったことでしょう。ついにイエスが公生活を始められると大喜びで会いに行ったことでしょう。あるいはイエスのほうで彼らを探したかも知れません。生活は以前と同じように貧しくても喜びを持って生きられるようになりました。イエスが罪の許しによる救い、永遠の命に至る福音をもたらしたからです。

彼らはイエスを十字架につけると叫んだ群集の中にはいなかったでしょう。いつもと変わらず羊の世話をしていたからです。そして復活したイエスの知らせを聞き、単純に信じたことでしょう。祝された羊飼いたち。単純で、素朴で、親切な彼ら。貧しさの中でいつも神からの光を求めていた彼らに神は天使を送って語りかけられたのです。彼らは聖家族に贈り物をただけでなく、神に讚美と感謝と言う贈り物を生涯送り続けたことでしょう。

(新井)

待降節第2主日

イザヤ40：1～5、9～11 IIペトロ3：8～11

マルコ1：1～8

待降節は基本に帰り、イエス・キリストを生活の第一にするべき時です。

暑い日曜日の午後でした。ジョンという名の脳性マヒの若者がクリケットのクラブハウスを歩いて通り抜けようとしていました。

ジョンは歩くのにも話すのにも苦勞し、食事也大仕事です。

ジョンが歩いているのを見ると人々は道をあげ、彼を見ないふりをするのが普通です。クリケット選手たちもジョンがクラブハウスを通り抜けようとしたときそのようにしたのです。彼らが自分をかからかっているのを見て、ジョンは気さくに「僕がみんなと違っているのはわかっているんだよ」と話しかけ、コリント人への第1の手紙15章10節を引いて「しかし神の恵みによって今日の僕があるんだよ」と言いました。

そしてジョンは自分の人生で神がどんな良いことをしてくれたかを話し始めました。更にこう言いました。「君たちには世界中でプレーし、たくさんお金を儲ける才能があるかも知れない。けどこの世を去る日が僕たちに来た時には、君たちと僕と何も違いはないんだよ。その時にはみんな同じになるんだ。今、僕は君たちが人生で持っているものがなくてもやっていけるけれど、君たちが僕の持っているものを必要とするのは確実だよ。つまりイエス・キリストのことだよ。」

この話は基本に帰るように私たちを招いています。自分に本当に何が大切なのか問うように招きます。詰まるところイエス・キリストが第1位を占めているかどうかです。

言い換えれば、基本から外れていたなら、今日の御言葉が私たちを戻るように招きます。だから待降節の間この世の心配事から離れ、主イエスの来臨を期待と喜びを持って待ち望みましょう。

(Beatrice)

待降節第3主日

「いつも喜んでいなさい」

(Iテサロニケ5:16)

パウロはいつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい、どんなことにも感謝しなさいと命令しています。これこそイエス・キリストにおいて神が望んでおられることだと付け加えています。神は私たちに不可能なことは命じません。だからいつも喜んでいることが可能なはずですが。しかし経験から言ってどうしても喜んでいられるのかと誰しも疑問に思うことでしょう。アッシジの聖フランシスコがこの疑問に見事に答えてくれています。

それはフランシスコがレオネと厳しい寒さの中を旅しているときのことでした。フランシスコが突然「たとえ、小さい兄弟たちがいろいろな奇跡を行なってもその中には完全な喜びがない」と言いました。またしばらくして「小さい兄弟が異言・預言のたまものを持ってそこには完全な喜びがない」、さらに「知識に超人的に秀でていてもそこには完全な喜びがない」「巧みな説教ができ、不信仰な人々を皆改心させてもそこには完全な喜びがない」と言うのです。レオネが驚いて、それではどこに完全な喜びがあるのかと尋ねました。

フランシスコはこう答えました。「私たちが修道院に着いたとき、門番が私たちだとわからず、悪党だと思い、入れてくれなかったとする。その時、神が彼にそう語らせているのだと思うなら完全な喜びがある。そして戸をたたき続けていると門番が怒って乱暴に追い立て、殴りつけても、喜んで我慢し、気高い愛を持って耐え忍ぶなら完全な喜びがある。」そして「聖霊のあらゆる恵み、たまものにまさっているのは、自分に打ち勝ち、キリストへの愛から、苦しみ、罵り、非道、不快を喜んで耐え忍ぶことである」と説明しました。

これは実際にあったことではなく、想定したことを例にあげて説明したのですが、弟子のレオネをこれほど感動させたのはフランシスコにこれをいつでも実行する心構えがあると感じたからでしょう。神は御子に似るものとなる以上のお恵みを与えることができません。フランシスコはこの最大のお恵みをいつも求めていたのでしょうか。私たちもごく小さいことならキリストに似るものとなることができ、完全にいつもとまでは行かなくても、大体いつも喜んでいられるようにはなれるのではないのでしょうか。

(新井)

待降節第4主日

Ⅱサムエル7：1～5、8～11

ローマ人への手紙16：25～27

ルカ1：26～28

「私たちの間の神の現存が
すべてのことを可能にする」

母親のおめでたが近づくと、ある意味で家族全体が一緒になって赤ん坊を待ち望みます。過去にでなく将来に素敵なことを期待するとき喜びがあります。クリスマスはそのような来たるべき出来事なのです。期待が若さを保ちます。私たちは過去でなく、未来に目を向けています。

クリスマスはそのような来たるべき出来事であって、毎年偉大なものですが、それは「エマヌエルー神共にいます」を待ち望む人に対してだけです。

今日の福音の中でマリアにおける「主の現存」はイエスの肉と血であることがわかります。ここで神が各人に異なった方法で現存すること、ちょうど人がお互いに異なった方法で現存するのと同じように現存することを思い出すべきです。例えば外国にいる子供は、母親に対して写真によってもっと直接的には手紙によって現存することができます。子供が帰ってきたら、肉と血によって最も直接的に母親に対して現存しています。

同様に、神は私たちに対して異なった方法で現存します。神は職場や道で出会う人を通して現存します。また優しい言葉や行ないを通して私たちの助けを必要とする人を通して現存します。どのようにして彼らに神が現存することを知らせるのでしょうか。マリアがエリザベスにイエスを現存させたようにイエスを他者に現存させなければなりません。しかし自分の中にイエスを持っていなければ与えることはできません。

私たちの世界は混乱しているでしょう。家族も、生活自体も混乱しているでしょう。しかし希望があります。神の力がイエスという人格において私たちの世界に入ったからです。これはクリスマスのお祝いを準備するとき、私たちの想像を超える喜び、夢を超え希望を与えます。

一キリスト教靈性史の中における聖人たち（7）一

『マザー・テレサ』

カルメル会助祭 松田 浩一 O.C.D

歴史の中の位置づけ

マザー・テレサは『神の愛の宣教者会』を創立し、貧しい人々、特に最も貧しい人々に仕える使命に生きた。彼女の精神には宣教者の血が流れている。教会における宣教とはどのようなものであったかを少しみてみることにする。

キリスト教の宣教は、イエス・キリストが「神の国の福音宣布」から始まっているが、この使命は教会にも引き継がれていった。教会は本質からして福音宣教をする使命を持っている。まず、ユダヤ人から始まって、西はギリシャ・ローマに福音を宣教し、東はインドまで宣教したという。南はアフリカ、北は小アジア諸国まで宣教をした。特にギリシャ・ローマの宣教が一番定着していった。このギリシャ・ローマの教会から全ヨーロッパ、ギリシャ、スラブまで及んでいった。あるものは、異端のキリスト教として中国にも及んだという。

歴史上日本に及ぶのは、1549年のフランシスコ・ザビエルの来日からである。この時期にイエズス会が誕生して、アメリカ大陸、インド、中国、北欧にイエズス会の影響がみられる。その宣教方法の主なものは、ヨーロッパ・キリスト教文化の導入が主であった。

また、女性の宣教者は無きにも等しかった。女性の宣教者が出てくるのは、19世紀に入ってからである。19世紀の終わりには4万4千人の修道女が宣教に出かけることになる。

また19世紀は、多くの宣教会が生まれて、宣教者を各地に送っている。この宣教熱は地理上の探検熱に付加されていったものであった。また、この探検は、強国の植民地政策と切れない関係もある。マザー・テレサが宣教にいったインドも当時はイギリスの植民地であった。しかし、19世紀末にカトリック教会はインド・セイロンを始め、アジア地区に多くの現地司祭を誕生させていた。これはカトリック信仰の受肉の推進の結果であった。特にインドでは、現地司祭が宣教師を上回っていた。だが、現地司祭は、宣教師に従属という形は残った。しかし、1923年にはインド人イエズス会士が司教に挙げられ、1926年には中国人6人が司教に挙げられ、現地の位階制度が誕生することになる。1927年には、初めて日本人を司教に叙階することになる。このように外国人の宣教から現地聖職者による展開に移行されていった転機が1920年代である。

その後、政治面では、インド・インドネシア・フィリピンにて植民地解放運動に直面し、第二次世界大戦後には、独立が始まる。アフリカでも1957年

のガーナの独立から始まって来る。この中で、カトリック教会は、正義と平和の観点から、諸民族の発展から、富める国民と貧しい国民の連帯、諸国家間の強調を呼びかけることになる。そして、それは今でも続いている問題でもある。

次に文化面の問題である。宣教師は、ヨーロッパ文化とキリスト教の宣教は切り離せないものであった。この自国の文化放棄によるキリスト教入信を広く浸透させ始めるのも、第二次世界大戦前後であろう。しかし、決定的な宣言は、第二バチカン公会議を待たねばならなかった。

このような急激な変化と課題の山住の中で、マザー・テレサは宣教活動に従事し、世界中に神の愛を知らせることになる。このマザー・テレサの生涯と思想をみてみることにしよう。

マザー・テレサの生涯と思想

マザー・テレサは 1910 年 8 月 26 日、マケドニアのスコピエで生まれた。両親のボヤジュー夫妻とともにアルバニア人である。翌 27 日に洗礼を授けられ、アグネス・ゴンジャと名づけられた。「アグネス」は初代教会の乙女殉教者であり、「ゴンジャ」はアルバニア語で「花の蕾」という意味である。ボヤジュー家は、長女のアガタと長男のラザロ、そしてアグネス・ゴンジャの三人の子供と、両親の 5 人家族であった。父親のニコラは忠実なカトリック教徒であり、熱烈なアルバニア愛国者であった。また社交的な人であり、行動的な人でもあった。母親のドナラフィルは宗教心の篤い人でもあり、子供たちを連れて、近くの教会のミサにはよく与かっていた。そしてドナラフィルは、定期的に食物やお金を持って貧しい人たちを訪問していた。また、この両親は暖かい家庭を作り出していた。夕方になって父親が帰宅する頃になると、母親のドナラフィルは髪を整え直し、身支度して出迎え、夕食を皆で食事をする。このときの家族の集まりを一種のお祝いのようにした。しかし、アグネス・ゴンジャが 9 歳のとき、父親の突然の死を迎える。この死は、毒殺の疑いのある死であった。この時期のマケドニアは回教オスマン・トルコの支配からの解放とともに、民族紛争が絶えなかった。このような歴史において生じた悲劇が、ボヤジュー家にも襲いかかったのである。

また、アグネス・ゴンジャの両親はアルバニア人カトリック教徒である。周りは、イスラム教徒の中で少数派であった。その中で生まれたものが相互扶助と連帯であるが、この地域には特別に契約（ベサ）というものがあつた。お互いの約束の神聖性である。犠牲を払ってもその約束を果たすというものであつた。このベサはアグネス・ゴンジャが修道生活に入っても貫いたものであるという。すなわち修道誓願も神ともベサというものがアグネス・ゴンジャの中にあつたであろう。彼女が修道誓願の神聖性を擁護するとき、このベサが力強さを増した。

少女アグネス・ゴンジャはまた、姉アガタとともに教会の聖歌隊に属していたし、同じ年頃の少年少女とともに、活発な日々を過ごしていた。1925年にイエズス会のヤンプレンコヴィチ神父が教会の主任神父になったことで、アグネス・ゴンジャの将来の方向性が決まり出す。この神父は若者のために信心会を造り、アグネス・ゴンジャもそれに加わった。この信心会の目標の一つに、「貧しい人々に仕えるキリスト」というものがあった。周りのスラム部落に訪問などをしていた。また、この信心会は聖人たちの生涯や宣教師たちの活躍ぶりを調べた。特にイエズス会士の宣教活動は詳細に調べた。また、1924年にはイエズス会の司祭たちが旧ユーゴスラビアからインドのベンガル地方に派遣されていた。この活動もアグネス・ゴンジャの心に刻み込んだようである。

彼女が18歳のとき、ミッシヨナリーになることを決意する。その目的は、「出かけて行って、そこの人々がキリストの命をもてるようにしたかった」ということである。ベンガルにいる旧ユーゴスラビアの司祭たちは、ロレット修道会のシスターたちがその地で長年にわたって活躍していることを書いて送ってきた。同会のアイルランド管区からシスターたちを派遣していたのである。アグネス・ゴンジャはこの会に入会することを決めた。母親の心境は、一般の母親と同じ心境であった。しかし、母ドラナフィルは「あなたの手を主に、主のみ手の中におきなさい。そして、いつも主とともに歩き続けなさい」という言葉をもって送り出した。アグネス・ゴンジャはもう一人のロレット修道会の入会者と一緒に、アイルランドのダブリンにあるロレット修道会の本部に送られた。

ここで6週間、英語を学び、インドのダーズリンで2年間、修練をした後に1931年、誓願を立てた。この時、シスター・テレサの修道名をもらった。この後、カルカッタ東部にあるエンタリーの女子高校に派遣され、20年近く教えた。当時のインドは、マハトマ・ガンディのインド独立の運動が始まっていたときでもあり、1930年に「塩の運動」という大衆的非暴力的抵抗運動があった。また第二次世界大戦の中でもあり、カルカッタは臨戦態勢にも入っていく。1945年に第二次世界大戦も終結するが、1946年にインド独立に先立って、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の紛争が起こり、カルカッタも血の海に変えた。この時、シスター・テレサは高校の校長であり、校長として対応をしなければならなかった。テレサはこの時、カルカッタの地獄絵を見た。彼女が「神の愛の宣教者会」創立の靈感を得るのは、この直後である。それは1946年9月10日、黙想のためにダーズリンへ向かう汽車の中でのことだった。それは「貧しい者の中で、最も貧しい人に仕える」ことであった。1948年8月16日にロレット修道会から旅立つことになる。

まず、始めにしたことは、活動をする前の準備である。テレサは教育のみに携わっていたが、貧しいひとに仕えるためには、医療看護も知らなければならぬ。そのため、医療修道女会のマザー・デンゲルのシスターたちから、その手ほどきを教えてもらう。また、健康に恵まれなかったジャックリーヌ

・ド・デッカーに出会い、彼女の祈りと苦しみを捧げる運動の助けを得ることになる。

このような実修の中に、極貧の人々の真の願望、身体のみでなく心と魂の渇きを癒す霊性が深まり、十字架上のキリストの渇きと一つになっていった。

このような準備をしてから、テレサは身一つでカルカッタのスラムに入っていた。

無一文で寺子屋を造ってそこで子供たちを教え、全く一人で生活をしていた。そうしているうちにスラム街の外れの一件の家の二階を借りて住むことになると、志願生たちが現れて、会の輪郭が出来ていった。1950年10月のロザリオの祝日に、会の創立をローマから正式に受け取る。この時からテレサはマザーと呼ばれることになる。そして、その活動は広がり、まず、「死を待つ人の家」が1952年に開設、「子供の家」の開設、「ハンセン病の人のための村づくり」、施薬所の開設、「刑務所から救出された少女たちの家」の開設など行っていた。また海外からの要請もあり、1965年には教皇認可の修道会になった。活動は必要に迫られて行すが、人間の品位を生きれるように接するのが、マザー・テレサの目的である。

この活動にはいろいろな協力者が加わる。神の愛の兄弟宣教者会、協労者のグループ、病者・苦しむ人の輪、観想修道会との絆などである。マザー・テレサは自分の会に固執するのではなく、ともに協力する術を知っている。それは地球規模のものであろう。このような協力者を得ながら世界中に飛び回り、「貧しい者の中で、最も貧しい人に仕える」活動を行っていた。そして、1997年9月5日、87歳でカルカッタにて帰天される。

さて、彼女の霊性はどのようなものであったのであろうか。

まず、宣教者であったということである。彼女の召命は、インドへの宣教から始まっている。インドへいくというキリスト教徒が少ない地域での活動は、宣教心がなくして出来ないことである。ロレット修道会からの召し出しも、「貧しい者の中で、最も貧しい人に仕える」ということも宣教心に関わることである。彼女の修道会の名前も「神の愛の宣教者会」といわれるくらい、宣教の色に染められている。この貧しい人への奉仕には、物質面と精神面に携わるものであり、一人の人間の生に奉仕するものである。そして、その貧しい人々に、神と人間から「愛されている」ということを知ってもらいたいという愛の発露に動かされた宣教である。そのために、彼女の生活は徹頭徹尾に神の愛に根ざしているものであった。

次に教育者としてのテレサである。インドに宣教しにきて行った活動は、女高生の教育である。約20年間の教育事業は、彼女の教育者としての姿を表す。どんな教育者であったかを知る一つのことは、マザー・テレサにとって家庭が一番の教育機関であると認識しているところである。家族が共に祈ること、愛は家庭から始まること、両親の信仰心をみて子供は育つこと、家庭の中でイエスを発見できるように勧めていること、家族の中の喜び、悲しみ、

苦しみを分かち合うことで愛を学ぶことが出来ることを話す。また、社会のトラブルの多くは家庭の崩壊からくることも話す。このように、家族の大切さは、自分の生い立ち、教育者としての体験から出てきたものといえよう。

次に彼女の名前に由来することだが、テレサの修道名は 19 世紀の聖人カルメル会の幼きイエスのテレーズから取ったものであり、彼女の霊性に大きな関わりを持っている。マザー・テレサが修道名を頂いたのが、1931 年ロレット修道会の初誓願のときであった。

幼きイエスのテレーズの生涯は、15 歳にしてフランスのリジューのカルメル会修道院に入会して、24 歳で若くして亡くなった人であった。しかし、彼女の聖性は瞬く間に全教会に知られることになり、1925 年には列聖されることになる。カルメル会女子修道院は、囲いの中で生活する観想修道院であるが、彼女の死後、彼女の生涯を綴った自叙伝が世界の教会に感動を呼び起こした。そして、1997 年 10 月 19 日には、33 人目の教会博士として、教皇ヨハネ・パウロ 2 世により挙げられた。女性ではアビラのテレジア、シエナのカタリナに続いて 3 人目である。テレーズは宣教の保護者として教会により与えられているが、同じ宣教を霊性面でマザー・テレサは受け継いでいる。実際にマザー・テレサから出た言葉に「わたしの保護の聖人は小さいテレサ（テレーズ）です」とある神父に言っている。神の愛の宣教者会の会憲の心臓に当たる個所、「わたしは渴いている」を説明するとき、マザー・テレサは幼きイエスのテレーズを引用している。この「わたしは渴いている」の個所の会憲は次のように書かれている。「わたしたちの目的は、十字架上のイエス・キリストの無限の渴き、人々への愛の渴きを癒すことにある。そのために福音勧告を守り、会憲に従って貧しい人の中の最も貧しい人に、心を込めて無償で奉仕することを公にする」。すなわち、キリストの渴き、人間が愛のうちに生きることを望んだキリストの愛にマザー・テレサの原動力がある。幼きイエスのテレーズの使命も、キリストの体である教会の心臓から流れ出る愛になることであった。マザー・テレサはこの心臓からあふれ出る愛を最も貧しい人々に運ぶことをした人である。宣教者とは、キリストの愛を十分に運ぶ人といえるであろう。

次に貧しさである。マザー・テレサは貧しい人に仕えるために、自分も貧しくなることを望んだ。貧しい人と同じ背丈になるために。貧しい人が一番接しやすいのは、自分の同じ背丈にいる人である。ここに出てくるのは連帯である。この連帯からお互いの分ち合いが出来るし、愛し愛されているという交流が可能になるのである。そして、奉仕を可能にする。愛の奉仕である。また、貧しいことは素朴さとその人らしさを出すことであり、人格的交流を可能にする。その他の貧しさの意味は現代の消費社会への挑戦でもあり、消費社会から出てくるゴミなどの環境問題にも関係してくることである。最終的には貧しさの中に生きている神の姿の現存に接することに向けられる。すなわち、マザー・テレサが神に委ねきる生き方に、その彼女に接する周囲の人たちに神との出会いを可能にするのである。

現代へのアプローチ

マザー・テレサは現代に生きていた人であり、多くの人が彼女の紹介をしているので、アプローチは書く必要がないほどである。実際に生きていた姿を全世界の人々が知っている。今回は、わたしがマザー・テレサから学んだことをまとめてみることにする。

マザー・テレサは宣教者であったということであろう。その宣教は、神の愛を宣教するものであり、すべての人が、それから除外されていないことである。一番末端にいる人まで、神の愛を受け取る人である。この宣教に必要な霊性を整えていったようにみえる。神の愛を伝えるためには、神の愛を自ら知らなければならない。彼女はいつもイエス・キリストの愛の渇きを求めた人でもある。御聖体にでもあり、祈りでもあり、貧しい人たちの中に求めていった。イエス・キリストを追う人であった。ただの社会福祉のために、貧しい人々に奉仕したのではない。イエス・キリストの現存を追った人である。そのため、彼女の奉仕には神の現存が見出されるのではなかろうか。そのことが分かる理由として、マザー・テレサに近づく多くの人々は、神の愛の手に触れたことによると考えられるからである。まず、彼女自身が、神の愛であるイエス・キリストを追った人であり、キリストが追ってきたマザー・テレサを使って、彼女の手を使って、人々に愛を示されたのであろう。そのため、マザー・テレサは祈りと秘跡を大切にす。ちょうど、木が成長するとその根がしっかり地の中に入り込まないと木が倒れてしまうが、この根の部分を秘跡と祈りでしっかりと這って水を吸い、その勢いで幹と枝である活動に従事していた。幹と枝が必要に迫られて伸びると、その関係で、根も伸びていく。活動によって、祈りも深まっていくということも見逃せないことである。このように宣教とは祈りによって実を結ぶし、祈りは宣教によって深まるということが出来るかもしれない。個人的にもそうであるが、教会共同体的にも同様であろう。観想修道院で、宣教の保護者となった幼きイエスのテレーズも宣教師たちと一つに結ばれていた。アビラのテレジアもアメリカ、フランス、インドにいった宣教師たちの話しの中で、教会の中の自分達の使命も深まっていった。逆に宣教師たちは、観想修道会の祈りを必要とした。マザー・テレサも観想修道会と絆をもっていたし、病気で苦しむ人々との連帯で、多くの助けを頂いている。互いに神の国の建設に協力しながら歩むことをしているのである。また、キリスト教信徒に限らず、ヒンズー教、仏教、イスラム教の人々にも受け入れられ、また、人間への奉仕において共に働いている。神の愛は、すべての人の心を動かす力を持っていることを教えてくれる。マザー・テレサはその協力を惜しまない。神の愛に動かされた人々は、同じ同胞とみている。このように地球規模の連帯を、神の愛の連帯をマザー・テレサは見せてくれたと思われる。

マザー・テレサは、愛の表現として、自分の手を差し出す。手で子供たちを抱き、手で病人の介護をし、手で奉仕をしている。この手は、愛のコミュニケーションを造る。神の愛はマザー・テレサの手を通して流れていったのであろう。最近はきつい、汚い、危険の3 K に手を出さない傾向があるという。しかし、マザー・テレサはその3 K にも手を出して神の愛の手を延べている。宣教にはこの神の愛の手が必要に思われる。

日本はまだ宣教国である。日本の教会でも宣教を優先課題としてあげているが、マザー・テレサから多くのことを学べるのではないかと考えられる。イエス・キリストを追い求めること、そこには祈りの大切さと神の愛の宣教が含まれているし、貧しい人々との連帯、すなわち神と人々の愛を求めてくる人を排除せず、愛を示すことや、神の愛の連帯、すなわち、教会共同体の相互の奉仕と教会外の善意ある人々との協力などがそうであろう。あるものは祈りのみとか、あるものは活動のみというように、関係を持たない個人主義や排他的グループは神の愛の宣教は難しい。個人主義に傾いている日本の社会で、このような神の愛の連帯は大きな福音宣教でないかと思われる。

<参考文献>

- トマス・ボーケンコッタ、『新世界・カトリック・教会史』，石井 健吾 訳，エンデルレ，1992
- L.J.ロジエ他，『キリスト教史・第10巻・現代世界とキリスト教の発展』，上智大学中世思想研究所，1982
- アウグスト・フランツェン，『教会史提要』，中村友太郎訳，エンデルレ，1992
- 和田 町子，『マザー・テレサ』，清水書院，1994
- ホアン・カトレット，『マザー・テレサ』，高橋 敦子 訳，新世社，1994

エクソシズム（悪魔払い）体験

新井延和

昔「エクソシスト」という映画がありました。ホラー映画の一種として面白がって見に行きましたが、後にこれが実話であると知って恐ろしくなったものです。ところで日本の教会にもエクソシズムを行なう人がいます。私も実はそういう人にエクソシズムをしてもらった経験があります。何かが出ていったような気がして、頭が軽くなったの覚えています。またいつのまにか元の状態に戻っていました。

しかしこれは憑依（ポセッション）ではなく、悪魔の妨害（オブセッション）をとり去ると言うものでした。憑依された人に対してエクソシズムをするには司教の許可があるとカトリック教会では定めています。（悪魔の妨害を退けるのなら司教の許可なしでできます。）

昨年イタリアで、司教の許可を得た本物のエクソシストに会い、エクソシズムに立ち会うというまたとない機会を得ました。悪魔に取り憑かれている人が、他の人に連れられてきます。エクソシストである神父が十字架と聖母の御絵を持って向かいます。エクソシストはキリストの権威をもって悪魔に立ち向かいます。ルカ4：35のように「主イエスの御名によって命令する。この人から出ていけ。」といます。私の貧しいイタリア語で聞き取れる範囲では、悪魔に取り憑かれている人は悪魔であるかのように受け答えしていました。しかしそれはルカ4：34などに見られる、イエスの権威に恐れおののくようなものでなく、「お前は私に対して何の力もない」という内容のものでした。

次にエクソシストはゲラサの悪魔憑きにイエスが仰ったように（ルカ8：30）、名前を尋ねます。悪魔が何も答えないので、エクソシストは「色でいえば何になるのか」と言って、色の名前を挙げていくと、悪魔憑きが黄色だと答えました。するとエクソシストは「黄色という名前の悪魔よ、主イエスの御名によって命じる。この人から出ていけ」と繰り返し言うのですが、なかなか出ません。この間、十字架と御絵を何度も悪魔憑きの体に押しつけます。両手で十字架と御絵を払い退けようとするので手を押さえる助手が必要です。私はこのためにいました。しかし決して全力で抵抗するのではありません。そもそもおとなしくエクソシストのところに連れられてきたのも不思議です。

結局2時間ほどエクソシズムをしましたが成功せず、次回またすること

になりました。私は2時間手を押さえ続けるのに疲れてしまい、助手を務めるのはもう御免蒙りました。

私のエクソシズムに対する考えは、結局のところよく理解できないと言うものでしかありません。悪魔憑きの現象をすべて、悪霊によると考えてよいのかという疑問がまずあります。エクソシストの中には精神科医、心理学者などと協力して行なう人もいるそうですが、このほうが穏当のように思います。悪魔と戦ったことで有名な聖ヴィアンネーも極めて慎重で、ある悪魔つきと見られる人に対する意見を求められたとき「神経が一部、狂気が一部、悪魔が一部だろう」と答えています。

人格的な悪が存在することは教会が初めから信じていることです。しかしだからといって悪魔を過度に恐れることはありません。イエスの十字架と復活によって悪魔は決定的に敗北しています。「悪魔を恐れる人のほうが悪魔よりも恐ろしい」という言い方があるくらいです。

むしろ社会現象の中に現れる魔の力のほうが恐ろしいと言えます。ほんの少し思いつくものを挙げてみてもナチスの狂気、オウム真理教の暴走、北朝鮮社会の惨状など、魔の力が働いているのを感じさせられます。これに対して「悪魔よ退け」と叫んでも何の力もないでしょう。地道な愛と正義の行ないだけが魔の力を封じ込み、社会を少しずつよくしていくのでしょうか。

イエスの悪魔払いには神の国の到来をあかしするものです（ルカ11：20他）。教会の時代である今、私たちの間におられるキリストが悪の力を退けられます。私たちはキリストの愛の業に協力するよう求められています。それには実にさまざまな形があり、その一つに新約聖書そのままのエクソシズムもあるのでしょうか。エクソシストは極めて特殊なカリスマです。例外的な人の(がみ)行なうことのできるもので、そういう人は神から特別に召されているのでしょうか。このカリスマと無関係の人は信仰と理性を使って信仰の歩み続けるべきです。たとえある程度靈感があるような気がしても（そもそも多分、錯覚にだまされているのかも知れません）、靈感に頼って歩んでいると信仰の力がだんだん弱ってきます。教会の大きな一致の中でエクソシズムがあってもいいと思いますが、なんでもかんでも悪霊のせいにするような捉え方は困ってしまいます。

心の清い人

(マタイ5・8)

心の清い人々は幸いである、その人たちは神を見る。

イエスの教えは、この山上の説教で、始まります。ティベリア湖を見下ろすカプアルナウム近郊の丘に登られ、イエスは、ユダヤ教の教師たちがするように腰を下ろすと、群集に向かって、「幸いな人」について語られました。この「幸い」という表現は、主のみ言葉をさまざまな形で生きた人をたたえるのに用いられたもので、旧約聖書の中には何度も出てきます。

そこで弟子たちはすでに、イエスの語られた「幸いな人」の姿のいくつかを知っていました。しかし、「心の清い人々」は、詩編に記されているように「主の山に登ることができる」(注1)だけでなく、「神を見る」ことさえできる、というのは、初めて耳にすることでした。このような素晴らしいことに値するほどの「心の清さ」とは、どのようなもののでしょうか。これについてイエスは何度も語っておられます。ですから、真の清さとは何かを知るためには、その源でおられるイエスの教えに従うことが求められるでしょう。

心の清い人々は幸いである、その人たちは神を見る。

イエスはまず、魂を清めるための最高の方法を次のように教えてください。「わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている」(注2)と。ですから魂は、宗教祭儀を通してというよりも、神のみ言葉によって清められるものです。イエスのみ言葉は、人間の言葉とは異なります。キリストはご聖体の中に現存されますが、み言葉の中にもおられ、み言葉を通して、キリストが私たちの中に入ってこられるのです。そして私たちが、み言葉を生き始めるなら、罪から解放されて自由になり、清い心を持つことができるでしょう。

心の清さとは、み言葉を生きた時に与えられる実りです。イエスの言葉はすべて、私たちが執着から解放してくれるものだからです。私たちの心は、神様とその教えの中にとどまっていけない時には、物や人、自分自身に執着してしまうものです。し

かし心が、ただ神様に向いているならば、神様以外のものはすべて、消え去っていくでしょう。

このように生きるためには、一日に何度も、次の詩編の言葉を繰り返し言うことが、助けになるかもしれません。イエス、神様に向かって「主よ、あなたにまさる善はない！」（注3）とすることです。特に、私たちの心がさまざまなものに執着してしまい、良くない思いや感情、欲望が生じて、何が善なのか分からなくなったり、心の自由を奪われそうになる時には、この言葉を繰り返しましょう。

また、良くない広告やテレビ番組を見てしまいそうになる時、それを断ち切り、神様に向かって「主よ、あなたにまさる善はない」と言ってみましょう。

このようにして私たちが、神様への愛を改めてはっきりと言い表すなら、それは自分の殻から外に出るための一歩となり、心の清さを保つことができるでしょう。

また時には、自分と神様との間に、活動や人が入り込んで、障害物のように、神様との関係を妨げようとするのを感じるかもしれません。その時にも、神様に向かって「主よ、あなたにまさる善はない」と言いましょ。

これによって、活動や人に対する私たちの思いは清められ、心の自由を取り戻す助けとなるでしょう。

心の清い人々は幸いである、その人たちは神を見る。

み言葉を生きる時、私たちは自由になり、清くされます。み言葉は愛であり、愛は、その聖なる火で、私たちの意向や内面のすべてを清めてくれるからです。「心」の中には、人間の最も深い知性と意思が含まれると、聖書も教えています。

さて、イエスが私たちに望まれる愛、私たちが今月のみ言葉にあるように「幸い」な者となることを保証する愛があります。「相互愛」です。イエスがされたように、相手のために命をも与える覚悟を持って、互いに愛し合うことです。お互いの愛があるところには、神様がおられ、その交わりの中には、澄みきった清らかな雰囲気生まれます。私たちの中に、清い心を生み出すことができになるのは、神様だけです（注4）。相互愛を生きるなら、み言葉が働いて、実りをもたらし、私たちが清め、聖なる者としてくれるでしょう。

人間は一人では、世の誘惑に負けずに生き続けるのが、難しいものです。しかし、相互愛があるところには、健全な環境が生まれ、私たちは清さを守りながら、真のキリスト者として生きることができるでしょう。

心の清い人々は幸いである、その人たちは神を見る。

このような心の清さを保つためには、たゆまぬ努力が必要ですが、その実りとして、私たちは「神を見る」ことができます。つまり、自分の生活や人類の歴史の中で、神様がどのように働いておられるかを理解できたり、心の中で神様の声を聞き取ることができるようになります。また、貧しい人やご聖体の中、み言葉の中、兄弟との交わりや教会の中など、さまざまところで神様の存在を感じ取ることができるようになります。

このように生きることは、「顔と顔を合わせて」（注5）永遠に神様を見る時まで、「目に見えるものによらず、信仰によって」（注6）歩みつつ、地上にいるうちから、すでに神様の存在を味わうことだと言えるでしょう。

キアラ・ルービック

注1 詩編24・4参照

注2 ヨハネ15・3

注3 詩編16・2参照

注4 詩編51・12参照

注5 コリント一13・12

注6 コリント二5・7

フォコラーレ本部

〒168-0071 東京都杉並区高井戸西1-11-4

TEL. 03-5370-6424

FAX. 03-5370-3055

諸所の企画についてのご紹介

I ノートルダム・ド・ヴィ (いのちの聖母会)

場 所：〒177-0044 東京都練馬区上石神井4-32-35 Tel(03)3594-2247

キリスト者の生活を深める祈りの集い *いのちの泉へ：聖人たちと共に祈る
1999, 12/18(土)「御手の中で」幼子イエスと共に

講 師：伊従 信子(ノートルダム・ド・ヴィ 会員)

プログラム：午後2時～午後5時半。+ミサ(日曜ミサ)講話、祈り、お茶&質問
申し込み：電話(18:00-21:30)又はFax(03)3594-2254。はがきで *参加費:200円

II スズラン・ハウス

女性のアルコール依存症、やせ症、摂食障害の経験者とその家族のためのウェルビーイングを研究開発実践する施設。

詳細を知りたい方は、下記へ：

〒192-0041八王子市中野上町4-27-4 TEL 0426-28-3222 井口 貴志

III 風 の 家

指 導：井上 洋治 師(東京教区司祭)

〒169-0042 東京都新宿区西早稲田-3-17-23-903 TEL 03-3204-4453

山根 道公 機関誌『風』編集者

*新住所 〒700-0808 岡山市大和町1-11-17

Tel・FAX 086-227-5665 詳細はお電話でお尋ね下さい。

IV 生命山カトリック別院

〒865-0133熊本県玉名郡菊水町蜻浦1391-7 TEL.0968-85-3100

祈りの集い：テーマ -三位一体のイコンの観想-

12月9日(木)

このほか、個人、グループでも静修、黙想会などができます。

お申込みは生命山別院へ

V 瞑想の家 東 光 庵

指 導：ヨハネ・ウマンス師(神言会) *詳細問い合わせは電話で

場 所：〒166-0004 東京都杉並区阿佐ヶ谷1-38-13 TEL 03-3336-0735

VI リーゼンフーバー神父による研究会 (1999~2000年)

①キリスト教入門講座 日時：金曜日 18:45 ~20:30
場所：聖イグナチオ教会信徒会館3階アルペホール
対象：キリスト教を学び、信仰を自分自身の問題として考えたい方どなたでも。予備知識は必要ありません。

12/3 隣人愛—他人の内にイエスに出会う *黙想会12/4-5

12/10 人間の弱さ—罪とは何か

12/17 恵みと赦し—神の憐れみを受ける

12/18 クリスマスのミサとパーティー (上智大かつらぎ会館)

12/23 ミサ (14時・上智大内クルトゥルハイム2階)

2000.

1/7 霊の動き—福音による生き方

1/14 聖書と教会—信仰の基盤になる言葉

1/21 秘跡と教会生活—毎日を養う信仰

1/28 神の言葉—神との日常的な対話と黙想のしかた

2/4 結婚と独身—愛の道

2/18 信徒、司祭、修道者—誰でも召されている

2/25 仕事という人間の課題—社会に寄与して働く

②神学読書会 日時：毎月第2・第4 (第5)水曜日 18:30~20:30

場所：SJハウス第5会議室 要申込み、定期的参加

対象：キリスト教の基本的知識を持っている20代~30代の方。

③聖書研究会*日時：毎月第1・第3水曜日 18:30 ~20:00

場所：S. J. ハウス第5会議室

内容：日曜日の聖書箇所を読んで一緒に考える。どなたでも。

*日時：木曜日 12:40 ~13:25

場所：上智大学7号館316号研究室

内容：新約聖書を1章ずつ読んで話し合います。

④坐禅会 日時：月曜日 17:20~20:10 木曜日 18:00~20:30

場所：クルトゥルハイム1階左の部屋 3回坐り、間に講話があり。

どなたでも。遅刻、不定期参加も可。

接心 2000/2月26日(土)8:30~27日(日)16:00 上石神井黙想の家 5600円

連絡先：①シスター朝山 TEL. 0727-59-3742

⑤ミサ：水曜日 17:10~18:00 場所：上智大学内クルトゥムハイム1階右小聖堂

⑥黙想：水曜日 18:00~18:30 場所：(同上)

(ミサ、黙想、共に (8月を除く))

⑦祈りの集い：下記土曜日 13:30~16:00 場所：S. J. ハウス第5会議室

講話、黙想、ミサがあります。

1999、12月11日、2000年1月8日、2月19日、3月4日

⑧黙想会： 1999、12月4日(土)10時~5日(日)15時、

⑨アガペ会：説明会と集い・右記の日13時30~ .1/22。(20代~40代の信者)

⑩クリスマス会：12月18日(土)16:30~ 上智大学かつらぎ会館地下ホール 要申込み

ミサ：12月23日(木)14:00~ 上智大学内クルトゥルハイム聖堂

以上、問い合わせ・連絡先：クラウス・リーゼンフーバー神父

〒102-8571東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学 S. J. ハウス

直通電話 03-3238-5124、5111(伝言)、FAX、03-3238-5056

Ⅶ 三位一体の聖体宣教女会 「祈りの家」

場 所：〒189-0003東村山市久米川町1-17-5 TEL.042-393-3181 FAX 042-393-2407

“聖書で祈る”

申し込み先…… 佐々木

指導：雨宮 慧師（東京教区司祭）

対象：女性信徒

2000. 2月26日（土）5:30P.M.～2月27日（日）4:00P.M.

召命を考える祈りの集い

指導：星野正道師（カルメル会）

対象：女子青年

日時：11月28日（日）10:00A.M.～5:00P.M.

2000 2月11日（金）10:00A.M.～5:00P.M.

年の黙想

指導：星野正道師（カルメル会）

対象：修道女

日時：1999年12月26日（日）5:30P.M. - 2000年1月4日（火）9:00A.M.

研究会 - 雅歌を読む -

講師：シスターマグダレナ（三位一体会）

対象：一般 信徒 お弁当持参

聖書に親しむ集い

講 師：シスターマグダレナ

テーマ：2000年に向けて 御父、御子、聖霊の交わり

対 象：一般信徒

日 時：5月～11月までの最終木曜日 2:00P.M.～3:00P.M.

キリスト教講座 毎週木曜日 10:00A.M.～11:30A.M.

十字架の使徒職 （司祭のために祈る集い）

対 象：信徒、求道者

指 導：本会 会員

期 日：第一グループ 毎月第2金曜日（2:00P.M.～3:30P.M.）

期 日：第二グループ 毎月第1木曜日（2:00P.M.～3:00P.M.）

Ⅷ マリアの御心会（明泉会）

場 所：〒160-0012 東京都新宿区南元町6-2 TEL.03-3351-0297

I. 黙想会 担当：シスター今村和子

①聖書深読黙想会 - 主日の福音を中心に -

隔月・日曜日 10:00A.M.～5:00P.M.

②黙想と祈りの集い

テゼの歌をうたいながら

③霊操による祈りの集い

指導：長町 裕司師（イエズス会） 毎月第3土曜日 6:00～8:00P.M.

II. ①聖書会 …詩編を読む…

毎月第1月曜日 10:00～12:00A.M.

②聖通読講座

木曜日 6:30～8:30P.M.

IX 聖心会黙想の家

場 所：〒410-1126静岡県裾野市桃園 198 Tel&Fax.0559-92-2120

祈りの集い（問合せ・申込は聖心黙想の家まで電話/FAXで！）

12月10（金）夕食～11日（土）午後5時まで。星野正道師（カルメル会）

● 午後のひととき、静かに過ごしてみませんか？

日時： 毎月 第2土曜日 午後4時～午後5時

場所： 不二聖心のキャンパスにあるどこかの聖堂（四箇所の一つ）

（当日黙想の家の玄関に表示します。）

内容： 沈黙の祈り（12/11）

* 一日黙想会

場所： 聖心会若宮共同体

日時： （以上全て火曜日）

黙想会のお問い合わせ・お申し込みは：165-0033東京都中野区若宮3-9-4

若宮共同体 TEL.03-3337-3291

聖心会シスター交野（かたの）

Xカトリック内観研究会

代 表：藤原直達（大阪教区司祭）

〒111-0053 東京都台東区浅草橋 5-10-5 カトリック浅草教会内

TEL&FAX 03-3862-8876

*予約相談は、まずはファックス・手紙でご連絡ください。*予約が決まれば、さらに詳しく場所、申し込み、諸注意、など送ります。

予定表 U11/28～12/4 茅ヶ崎

V12/13～12/18 横浜・戸塚

W12/26～001/1 会場A

公開講座 イエスと日本人 -キリスト教の文化内開花の問題-

日 時：1999年. 12/13

月曜日 10:00～12:00

受講料：7,500円。一般8,400円（入会金不）（受講料に消費税5%が加算）

場 所：新宿住友ビル48階 朝日カルチャーセンター（受付は4階）

朝日新聞の文化活動 朝日カルチャーセンター

〒163-0204新宿区西新宿 2-6-1 TEL:03-3344-1941 私書箱22号

TEL:03-3344-1945

XI. コングレガシオン・ド・ノートルダム

係・山本 三千代

TEL(昼間0424-82-8056)

(夜間0424-822012)

個人指導の黙想会

場 所：〒182-0034 東京都調布市下石原3-55

TEL(0424-82-2012)

コングレガシオン・ド・ノートルダム

FAX(0424-82-2163)

上野毛・宇治・大分

カルメル修道会 聖テレジア修道院 (黙想)

聖テレジア修道院(黙想)は、祈りの生活を体験し深めたい方のためのものです。
黙想会・研修会・練成会などにご利用ください。個人でも団体でもご利用頂けます。
また、皆様が企画したプログラムの黙想会もお受け致します。
詳しいお問い合わせは下記までお願いいたします。

〒158-0093

東京都世田谷区上野毛2-14-25

Tel 03-5706-7355

携帯 090-8720-9950

Fax 03-3704-1764

- ・東急 大井町線「上野毛駅」下車 徒歩7分

〒611-0002

京都府宇治市木幡御蔵山39-12

Tel 0774-32-7016

Fax 0774-32-7457

- ・京都駅よりJR奈良線「六地藏駅」下車 徒歩15分
- ・京阪バス 六地藏駅近くの「町並」バス停より御蔵山行きに乗り
「西住宅バス停」下車 徒歩5分

〒870-1152

大分市上宗方1800-3

Tel 097-541-4012

Fax 097-541-4404

- ・JR大分駅よりバス 富士見が丘行(他)約18分
「明礮橋」下車、橋を渡って右折



カルメル修道会

お 原 頁 し

投稿くださるときには、だいたい、次のようにしていただけますと幸いです。

1. 締 切 り 毎月10日
2. ①各グループの 目的 或いは 主旨
②月間 或いは 年間予定：研修、黙想など具体的計画
③随想、こぼれ話など。「断想」「陽あたり」とか小題をつけて
④その他 自由ニュースをお送りください。
3. ワープロ。 なお、手書きの場合は早目にお送りください。
4. 原稿が長い場合、編集段階で選択したり、数回に分けて掲載させていただく場合があります。お赦してください。
5. 寄稿連絡は星野正道神父宛てにおねがいします。

・ニュース（霊性センターニュース）をご希望の方は 中尾豊子宛 に郵送御希望の月数分の220円切手又は現金を送ってください。（これには封筒代等が含まれています。）

中尾 豊子 〒224-0041 神奈川県横浜市都筑区仲町台 3-15-5

☎045-941-3566

あ と が き

「霊性センターニュース」も奥村神父様の時代以来、常に変わらぬご理解とご支援をいただき心から感謝申し上げます。今後もこの小さな種が皆様の暖かなご協力のもとに、すこやかに成長していくようお祈りください。

なお、“一口一円”の呼びかけで始まった献金も、神様の御手の中で大きな助け手、働き手となってきています。ご協力、本当にありがとうございます。

喜びと悲しみ、日々の小さなことがらを通してイエス様が働きかけ、共に生きてくださいますように、お祈りいたします。

カルメル会霊性センター

星 野 正 道